

伊藤 澄夫

伊藤製作所社長
中京大学特別栄誉客員教授

モノづくりの現場から

本誌11月号では安倍総理の突然の辞任について述べた。その中で、特に外交面では実績を上げ、多くの国のリーダーや高官から高い称賛を受けた安倍総理のアジア歴訪に同行させていただいたことにも触れたが、その内容を今号ではまず紹介したい。

フィリピンでのスピーチ

それは2017年1月12日から17日までの日程で行われた安倍総理(当時)のフィリピン、豪州、インドネシア、ベトナムの4カ国歴訪に、総勢76社に及ぶ経済ミッション団の1人として招待され、同行する機会を得たというものだ。

私はその歴訪のうち、社長を務める伊藤製作所の現地法人があるフィリピンとインドネシアの訪問に同行。ちなみにフィリピンには28人が参加した。そして7人の団員が「日本・フィリピンビジネス会合」という場で、フィリピンでの取り組みを紹介する機会をいただいたので、私は次のように発表した。

当社のフィリピン現地法人 i t o

ている大使館員やジェトロのみなさんにも大変喜ばれたのであった。
なぜ中国を避けたのか

当社が海外進出した当時は、マスコミや金融機関が中国への進出を奨励していた時代だったが、私は海外進出先としてタイかフィリピンしか考えていなかった。そして、金型工業会の仲間をはじめ、講演などでも「中小企業は中国へ行くべきでない」と声高に伝えていたためか、多くの皆さんから「伊藤さんは右翼かな?」と言われていたものだ。

あのころ、私が中国への進出をそこまで反対した理由を振り返ってみたい。

現在は順送り金型と精密プレス加工の専門メーカーである当社だが、それ以前、先代が漁網機械関係の製造をしていた関係で、商社を通じて多くの消耗部品を中国に輸出していた。その際に商社マンから入る中国の商習慣は、日本ではありえない悪しき例が多かったのである。それは集金の心配、突然のキャンセル、不法な値引き、

Seisakusho Philippines は1996年に設立しました。タイでの合弁会社設立を断念して、あえてフィリピンに決めた背景には、①進出企業への税制優遇、②フィリピン人の高い教育レベルと語学力、③日本に対する世界屈指の友好国、④日本から近く、同じ島国で国民性などに共通点が多いことがあります。アジアでは日本以外で最も早く自動車生産を始め、モノづくりのセンスが良いことも大きな要因です。マーケットの小さなこの国に進出することに、当初は周囲から反対の声もありましたが、結果は正しかったです。

現地スタッフはみんな金型づくりが楽しそうで、「会社もイトウサも大好き」と言ってくれます。設立以来、家族的な経営に心掛け、わずか6年余りで日本と同レベルの技術を習得したため、日本人技術者の2人が帰国できたことで利益は急増しました。過去に輸出した実績で、今や日本やインドネシア、タイ、メキシコなどから「メイド・イン・フィリピン」の金型

契約のない追加の要求、裏金の要求などなど、民度の高い日本人ではついていけないようなことばかりだったのである。これに加えて、日本企業の高い技術のパクリやバッシングなどもあったのだ。中国は最近になって急に進出先になさわしくなくなったのではない。以前から中国の商習慣は変わっていない。

19年前、三重県庁主催の集まりにおいて、中国進出のテーマで講演をさせていただいたことがあった。話の締めくくりで、「金融機関や県庁が中国進出に背中を押すことはよくない。なぜなら、一般的に中小企業は海外事情に詳しくなく、金融機関や県庁が進めるなら安心だから行ってみようか」となる。もし失敗した場合、県が責任をとれるならよいが、そうでないなら安易に奨励してはいけないのではないかと伝えた。主催者側の顔に泥を塗るような話をしたため、大いに嫌な顔をされたことを記憶している。

知り合いの多くの企業は、私が反対したにもかかわらず、その大

は高く評価されているのです。
2017年4月には精密金型の「輸出専用工場」が完成しますが、5年後の2022年にはアセアンでナンバーワンの精密金型企業を目指します。「精密金型のフィリピン」と言われる時代はもうすぐです。2013年にはインドネシアにも進出しましたが、操業開始に当たってフィリピン人のトップ技術者5人が、金型製作と品質管理を指導しました。日本の技術がマニラへ、そしてマニラからジャカルタへ伝わることになりました。当社のフィリピン進出が正しかったことが、おわかりいただけたことと思います。

これについて、外務省から前もって紹介の文面提示を求められていた。アジア諸国と親善が主目的であることからそれは当然のことだろう。発表時間が決まっているため文字数の制限があったのだが、私は提出した原稿をそのまま読み切ることを強く求められた。そしてビジネス会合終了後、フィリピン政府の大勢の関係者が、微笑みながら握手を求めてきた。駐在し

半は中国に進出。案の定、ほとんどが痛い目に遭っている。
中国が永久に進出先としてふさわしくないといまでは思っていない。あの国の主席や国会議員が国民による選挙で公平に選ばれるようになれば、進出してもよいのではないだろうか。



いとう・すみお

1965年立命館大学経営学部を卒業後、伊藤製作所に入社。1986年同社代表取締役就任、現在に至る。順送り金型メーカーの老舗企業であり、国際競争力のある金型製造技術の確立に努め、無人化、高速化、精密化を追求したプレス加工で卓越した技術力を誇る。

(社)日本金型工業会・副会長・国際委員長を歴任。中京大学特別栄誉客員教授、国立ソウル科学技術大学校名誉教授、神戸大学非常勤講師を務めて後進の育成に寄与。

2017年4月春の叙勲「旭日単光章」受章。著書に『モノづくりこそニッポンの砦』『ニッポンのスゴい親父力経営』『日本製造業の後退は天下の一大事』がある。